



2016. 07. 11

北海道サケネットワークは、サケをシンボルとして「豊かなふるさと」を守り伝えるために活動する市民運動や参画団体間の連携を図るのが目的です。ニュースレター（NL）もその一角を担っておりますが、諸事情によりしばらくお休みしておりました。深くお詫び申し上げます。この度、NLの配信を再開しましたので、情報共有に役立てていただければ幸いです。前回の配信（2015.09.12）から間が空いてしまいましたので、今回はこの間の主な出来事を振り返るとともに、今後の予定をお知らせします。

### これまでの経過

#### 2015年度北海道サケネットワーク総会とサケ会議

2015年11月7日13:00から札幌市の佐藤水産文化ホールにおいて、北海道サケネットワーク総会とサケ会議を開催しました。

#### 総会

2014年度の活動、予算関連、2015年度の活動について報告と提案があり、全て承認されました。

次年度の役員改選に向けて、役員の新補充を検討することにしました。

ネットワークの事務局を担っている「北海道サーモン協会」の解散が予定されていることから、これに代わる新団体を設立して事務局を引き継ぐことが提案され、承認されました。

参画団体から以下の情報提供がありました。

- 北海道さけます内水面水産試験場  
サケの来遊は9月に多く、10月に減少。爆弾低気圧の影響か。漁網に被害。
- 標津サーモン科学館  
標津小学校でサケの授業を継続。上流域へサケ親魚を遡上させる試み。
- 岩手大学三陸復興推進機構  
農学部の水産コースを新設。水産の6次産業化。岩手県のサケの漁獲が減少。震災の影響大。漁業の復活が必須。
- 札幌市立東白石小学校  
サケ稚魚の放流を継続。稚魚を育てる喜び、命の大切さを学習。
- 札幌市豊平川さけ科学館  
豊平川に“順応的管理”を導入。野生魚を育て、人工放流を削減。今年は20万尾から8万6千尾へ。琴似発寒川では100尾以上の野生親魚を確認。
- 丸水札幌中央水産(株)  
輸入鮭鱒が増加。中国への輸出に左右される。天然サケをアピール。
- 大雪と石狩の自然を守る会  
2003年から旭川周辺の石狩川でサケを確認。2011年には群れで遡上。産卵床調査を継続。市民の関心が高まっている。
- 十勝川の生態系再生実行委員会  
大掛かりな活動から、小学校への出前授業など小規模な活動へ移行。
- 北海道サーモン協会

サケ学習国際交流カナダ派遣事業、公開市民講座、夏休み親子サケ教室、サケ稚魚体験放流・サケフェスタへの協力、豊平川河畔の清掃活動等を遂行。諸事情により今年度をもって協会の解散を予定。

## サケ会議

今回のサケ会議は北海道新聞から本田良一氏、日本水産から檜垣匡英氏を来賓としてお招きし、講演をしていただきました。

テーマ：サケの生産、流通を巡る現状と課題・展望

趣旨：流し網の禁止、輸入サケの増加など今日のサケを巡る情勢は市民の生活にも関わる課題となっている。このような状況から日本のサケ漁業の歴史を学び、サケの生産、流通の現状と課題について考える。

## 講演

- **北洋漁業の遺産と日ロ漁業のいま**（北海道新聞編集委員 本田良一氏）  
日ロ漁業は1)北洋サケ・マス漁、2)サンマ・マダラ等、3)貝殻島周辺コンブ漁、4)安全操業(スケソウ・ホッケ・タコ)の4つの枠組みから成る。1907年、日露漁業条約の発行から本格化。1964年は5万人が従事し外貨獲得に貢献。しかし、漁獲枠超過、小型船の違反操業等が原因で取り締まりが強化され、2016年1月1日からはサケ・マス流し網が禁止。道東経済への影響は251億円と試算される。北洋漁業は日本と旧ソ連の架け橋であり、共存は画期的。この遺産を生かした資源管理等の協力が望まれる。
- **標津のサケの現状と課題**（標津漁業協同組合専務理事 織田美登志氏）  
近年、サケの漁獲量が減少。1990年代後半に比べ、近年の漁獲尾数は1/3程度。原因は不明。標津町サケマス自然産卵調査協議会、地域HACCP推進委員会、3者会議(標津町、標津漁協、標津農協)等を立ち上げ、産卵状況、産卵適地面積、環境等を調査。標津川や伊茶仁川支流の落差工を改修し、親魚の遡上と自然産卵を促進する等、野生資源の活用計画を実行。酪農業と水産業の相互理解が進む。一方、標津産サケのブランド化(船上一本)、鮭すり身製造活動等を推進。
- **輸入サケの現状と展望**（日本水産株式会社 水産事業第一部 事業第二課 課長 檜垣匡英氏）  
過去5年間でサケの価格が上昇。和食がユネスコ遺産になり、海外で日本食レストランが増え、またオリンピックへの期待等が要因と思われる。世界的には養殖魚(250万t)の供給が天然魚(100万t)を超えた。しかし、養殖魚にも慢性的コスト高、過密飼育の影響、需要の伸びに追いついていない等の課題がある。また、円安は輸入に悪影響。脂が乗った養殖魚は人気高だが、天然秋鮭への需要と期待は高い。マーケティングが重要。良い魚をうまく加工すれば売れる。
- **サケに対する想いや商品作りについて**(佐藤水産株式会社 取締役 佐藤公彦氏)  
佐藤水産といえばサケ。佐藤水産の信条は、①天然サケへのこだわり: 餌料添加物への不信、安心・安全な天然魚、②無駄のない活用: 生まれた川へ帰れなかったサケに敬意、新巻・切身・氷頭レモン・水煮缶・メフン・内臓醤油漬・皮・白子ザンギ等々、無駄なく100%利用。③サケを含めた全ての魚に感謝: 10月末に供養祭、④高い加工技術: 新巻人気の低迷、雪中

で熟成新巻、洋風サーモンロール、ソーセージ、フレーク等々を開発。⑤  
お客様目線に立った商品開発:切らずに食べられる一口スジコ等が好調。

## 北海道サーモン協会が解散

2016年4月22日(金)、北海道サケネットワークの設立当初から事務局として牽引していただいた北海道サーモン協会が、諸事情により長い歴史に幕を下ろすことになりました。この場をお借りし、当ネットワークへの協力に感謝申し上げるとともに、同協会の足跡を振り返りたいと思います。

北海道サーモン協会の活動の原点は、1978に始まった「カムバックサーモン」運動に遡ります。この運動は、河川環境の悪化により途絶えていた豊平川のサケの遡上を復活させようというものです。当時の想いは、『札幌「サケ」の憲章』に謳われた「豊平川に上るサケは、美しい環境をつくり、新しい市民意識を育て、明るい未来を招きます」との一節からうかがい知ることができます。

この活動は実際にサケを帰すことで大成功を収めました。その後、カムバックサーモン運動の理念は「北海道サケ友の会」に引き継がれますが、毎年サケが上るようになって市民の関心が薄れたこともあり、発足から27年におよぶ活動は一旦終止符が打たれます。しかし、自然を守る活動は継続こそが重要との思いから、「サケをシンボルに豊かなふるさとを子ども達に残し伝えよう」との新たな理念を掲げて2005年に発足したのが北海道サーモン協会です。

北海道サーモン協会は予算が不十分ななか、会員の献身的な協力により1)公開市民講座、2)サケ学習国際交流、3)サーモンロードふれあいツアー、4)サケ会議の開催、5)産卵床観察と河畔清掃、6)夏休み親子サケ教室等、多岐に亘る事業を展開してきました。しかし、諸事情により惜しまれつつも2016年4月22日の総会をもって解散することになりました。

北海道サーモン協会の皆様、永年の活動お疲れ様でした。

## 「札幌サケ協議会」が新会員加盟登録

昨年の総会において、解散予定の北海道サーモン協会に代わり北海道サケネットワークと北海道サケ会議の事務局を担う新たな組織を発足させる提案が承認されております。これを受けて同ネットワーク事務局が検討を重ねた結果、既にお知らせしているとおり、2016年6月に「札幌サケ協議会」を発足させ、新規に会員の登録をしました。

協議会の主な構成

代 表: 阿部周一(北海道大学名誉教授)

事務局長: 木村義一(前北海道サーモン協会代表)

引き続き当ネットワークの円滑な運営にご協力をお願い申し上げます。

## お知らせ

改めてのご案内になりますが、今年も北海道サケネットワークの総会とサケ会議を以下の予定で開催します。皆様のご参加をお待ちしております。

### 2016年度北海道サケネットワーク総会とサケ会議の予定

日 程: 11月12日(土)

場 所: TKP 札幌カンファレンスセンター

(札幌市中央区北3西3-1-6、電話:011-252-3165)

### 北海道サケネットワーク総会

開 始: 13:00~

議 題: 報告事項、協議事項、情報交換

### サケ会議

開 始: 14:00～

テーマ: 小学校におけるサケ学習の現状と課題 (仮)

演 題: 小学校におけるサケ教育の現状と課題 (仮)

水族館における児童のサケ教育 (仮)

パネルディスカッション: 児童のサケ教育に対する今後の期待 (仮)

**サケネットワーク事務局**